

多彩な文化が共存する 島国スリランカ

クムディネイ・ディサナヤカ

文化というものはあるひとつの社会に住む人々に見られる共通の考え方や行動パターンとして捉えられよう。性質と捉えるならば文化は、価値観、規範、信念、思考方法などであり人間の内面にしっかりと根づいている。工芸品や、シンボル、伝統振る舞い方などにおいても文化の違いが目立って見えるものである。あるひとつの社会の中で異なった価値観、規範、ものの考え方、行動方式、伝統などが共存している場合、多文化性が存在すると理解してもよいだろう。

スリランカは、六五六一〇キロ平方メートルの小さな島国で、人口は約二〇〇〇万人だ。しかし、多文化社会を受け入れそれを育んできた国である言えよう。スリランカの人々はいくつかの民族に分かれ、さらにそれらの民族がいくつもの下位グループに分かれる。具体的にはシンハラ人（七四％、キャンディアンと低地シンハラ）、タミル人（一八％、スリランカ・タミル、インド・タミル、マレー）、ムーア（七・五％、スリランカ・ムーア、マレー）、バーガー（オランダ人、ポルトガル人）、パーシス、コロンボ・チェッティ、そし

て密林に暮らすヴェッターなど（あわせて〇・五％）という具合である。結果、民族が違えば信仰する宗教も異なってくる。仏教（大多数を占める）、ヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教が社会に普及している。

またスリランカでは属する共同体が異なる分だけ話される言語も多様である。（例えば、シンハラ語はシンハラ人が、タミル語はスリランカ人やインド・タミル人が、アラビア語やマレー語はムーア人が話している、といった具合だ。）英語は第二外国語として国の共通語となっている。

国土は狭いとは言え、人々が使う言葉の独特な言い回し、会話での発音の仕方、遊び方や祭礼のスタイル、伝統などを通してはつきりと文化の違いが読み取れるのである。地方によっても文化の独自性がある。また、食するものも大きく異なるし、食習慣も違う。衣服の習慣や服装のスタイルにも各民族の独自性が表れている。

どうしてこのように多様な文化が育ったのだろうか？ 主に近隣の国々（インド、モルジブなどアジア諸国）や、旧宗主国（ポルトガル、オランダ、そしてイギリス）が歴史的に及ぼした影響が強いと言えよう。だとすれば、歴史研究者はこの島国で多くの文化が存在するのは当たり前と考えるかもしれない。だが、スリランカにおける多文化性には別の一面があることに気がつく。それは次のような情景を見るときだ。異なった信仰を持つ異なった民族の人々が島中いたるところから神仏、救世主に祈りを捧げに同一の場所に集まってくる。彼らは自分たちが信じる教えはまちまちではありながらも全体として平和を乱すことなく参集するのだ。そのような聖地がスリランカには三カ所ある。アダムス・ピーク（中央州）、カタラガマ・デヴァアラヤ（ウヴァ県）、そしてムンネーシユワラム寺院（北西部州）である。以下、これら三

つの聖地について説明しよう。

● アダムス・ピーク

アダムス・ピークはスリランカ人には「スリー・パード（聖なる足跡）山」としても知られている。シンハラ語では「サマナラ・カンダ（蝶々の山）」、タミル語では「シヴァノリパタ・マライ」と呼ばれる。南部丘陵郡に聳え立つ二二三メートルの山である。この山に巡礼者が訪れるようになり、山頂近くにある長さ一・八メートルの岩でできた聖なる足形が有名になった。仏教の言い伝えによるとそれは仏陀の足跡であるという。ヒンドゥー教の言い伝えではそれはシヴァ神の足形だという。そしてムスリムとキリスト教徒の伝承によればアダムの足跡だという。

仏教の経典は釈迦は悟りを得てから八年後にナーガ王に請われスリランカを訪れたとある。この機会に釈迦は三つの地を訪れた。秀峰サマナラ・カンダもそのひとつである。ここで釈迦はこの山の守護神スマナ・サマンの求めに応じて、頂上にある寶石の原石に自分の左足の跡を残したのである。ヒンドゥー教の言い伝えでは、それはシヴァ神の足跡といわれている。シヴァノリパタ・マライという名前はそれに由来する。一方、スリランカのムスリムはそれをアル・ロフン（ソウル）の足跡と呼んでいる。キリスト教徒は、足跡はアダムがエデンの園を追放された後、最初に地上に足を踏み入れたときに印したという（アダムス・ピークという名前はここから来ている）。同じキリスト教でも、紀元一世紀に南インドにキリスト教をもたらしたセント・トーマスの足跡だという説もある。

誰の足跡であるにせよ、そこが四つの宗教を信じる人々にとって聖なる巡礼地であることには変わりがない。山の頂上には仏教寺院とスマナ・サマンの神殿がある。アダムス・ピークを登るのは

一二月の満月の日から五月の満月の日までの間に限るとされてきた。地元の人に混じり外国からの旅行者も美しい日の出の情景を堪能しながら登山を楽しんでいる。

●カタラガマ

シンハラ語でカタラガマ、タミル語ではカティルカマムという。スリランカ南部に位置する巡礼の町であり仏教徒、ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒、そしてスリランカと南インドのヴェッダー人の巡礼地となっている。この聖地にはいくつもの聖堂があり、それらは、カタラガマ神（スカンダ・ムルカンとして知られる）、シヴァ神、ヴィシュヌ神、ガネーシャ神が祀られている。その他に、キリ・ヴェヘラという名の仏塔と寺院、そしてイスラームのモスクが建ち並ぶ。

伝説によると、釈迦は最後となる三度目のスリランカへの旅でその当時カタラガマを治めていたマハセナ王と会見したと信じられている。マハセナ王は釈迦から説法を受け、その地に釈迦への感謝のしるしとして仏塔を建立したという。カタラガマ神はこの島の四大守護神のうちの一つとしてスリランカのシンハラ系仏教徒の多くから信仰を集めている。

ヒンドゥー教徒と仏教の教典はともにカタラガマの中心となる寺院が祀っているのはスカンダ・ムルカンであるとしている。スカンダはインド北西部を起源とする戦の神である。スカンダ神がみそめて妃としたのがこの地に生まれ育ったヴァツリという女性とのこと。かたや、ムスリムの伝説ではどうかというと、アル・キドウルと呼ばれる

仙人がこのカタラガマ丘陵に現れ、苦行と祈禱を行ったと言い伝えられている。ムスリムによればカタラガマは「ア

ル・キドウル」の地」という意味を持つているという。ヴェッダーの人々にとつてスカンダ神はカンデ・ヤツカ(岩山の神)と形を変える。カンデ・ヤツカは彼らの最高神として崇められており、狩猟の前に必ずその御霊に祈りを捧げている。その妃であるヴァツリ・アンマ女神はヴェッダーの民で先祖に持つと信じられている。このためヴェッダーの人々は毎年カタラガマ・デヴァアラヤのお祭りの際に、人々の安寧祈願の意味を込めて弓矢で武装して行列に参加するのだ。カタラガマはスリランカに一六ある主要な仏跡の一つであり多くの旅行者でにぎわう。毎年行われるデヴァアラヤの行列は多くの旅行者を引きつけている。

●ムンネーシユワラム寺院

ムンネーシユワラム寺院はプッタラム地区の北西部州のある村に建っている。そこはシンハラ人とタミル人が入り交じって生活を営んでいるところだ。寺院の敷地にはは五つの聖堂からなり、その一つは仏教寺院である。中央に位置するのはシヴァ神を祀る寺院で最も規模が大きく、威厳があり、ヒンドゥー教徒には人気の寺院だ。残りの四寺院はガネーシャ神、アイヤナーヤカ神そしてカーリー神がご本尊として祀られている。カーリー寺院は仏教徒、カトリック教徒にも親しまれている。一九世紀の後半までこの複合型寺院の参拝者のほとんどはシンハラ人の仏教徒であったと記録にある。アイヤナーヤカと仏教寺院以外の寺院は少数のタミル系ヒンドゥー教徒の一族により管理されていた。

スリランカの内戦が終息するとともにこの聖地は再び静けさを取り戻し、多くの人々が訪れそれぞれが抛りどころとする信仰の祈りを捧げるようになった。外国人観光客も増えた。特筆すべきことはこれらの巡礼地を訪れるシンハラ人の仏教徒

の多くが他の少数宗教集団に伝わる伝統行事と一緒に参加していることだ。例えば、カタラガマで行われる祭りの行列で仏教の巡礼者が「カワディ・ダンス」を踊っている光景を目にする。カワディ・ダンスはヒンドゥー教徒がスカンダ神に捧げる踊りなのである。祭りの熱狂と恍惚感がこのような行動につながっていくのだと思われる。同じようなふるまいはこの島のいたる所、様々な機会に際して受容され広まってきた。いろいろな宗教にまたがった行事を政府が執り行うことも習慣になってきている。

以上、スリランカではさまざまな信仰が調和を保って共存し多様な文化社会を作り出していることを述べてきた。物理的には狭く限られた国土といえども民族的、宗教的、言語的、地域的に多様な性をもった共同体が存在しており、人々がともに助け合い、平和に暮らしていくことは可能であることを現実が立証しているのである。

(注) 本稿を執筆するに当たり Wikipedia を参照した。

